

近世東阿野村の医家三田氏

－医療と文化交流の姿－

人間環境大学 非常勤講師 堀崎 嘉明

はじめに

これまで知多郡東阿野村の医家三田氏について、同家文書の本格的な解読が未着手のために、その具体像の紹介は十分ではなかった⁽¹⁾。ところが近年に当主三田利保氏の御厚意で同家所蔵史料の閲覧調査が許され、医療活動の姿と朝鮮通信使の遺墨画などを新たに発見することができた。またこの間に愛知県史編さん室による調査で、同家史料の紹介・解説⁽²⁾もなされた。小稿はこれら史料の解読を通じて新たに得られた知見を、表題の視点から述べるものである。

1. 東阿野村の医家三田氏による医療

(1) 東阿野村の概観

まず本题の舞台である東阿野村⁽³⁾の江戸時代における姿から見てみよう。村が尾張藩に編入されたのは1606年(慶長11年)で、東海道阿野に一里塚が設置された2年後であった。17世紀中頃の規模は石高約418石、家数114軒、人口586人⁽⁴⁾で、村の境界線は東では三河国今岡村境川、南は大脇村、西は五軒屋新田、北は間米村・杓掛村支邑高鴨吉池・小所中川、杓掛新田支邑大久伝・川部となり、その内が村域であった。

また村の景観は1841年(天保12年)作成の「東阿野村絵図」(図1)からも見て取れる。中央両側の松並木の中を東から西の村境五軒屋新田に延びる往還筋、その手前中程に見えるのが元屋敷の地で、1671年(寛文10年)以前には多くの村民が暮らしていたが、境川下流域の低湿地のため雨水が溜まりやすく、上流からの洪水にもよく見舞われた。そのため次第に難を避けて西北高台へ移り住む村人が多くなり、生活の安定化が図られていった。19世紀初頭の村勢は石高663石、家数163軒、人口748人⁽⁶⁾と記録され、後世作成の絵図には該当場所に多くの家が描かれている。

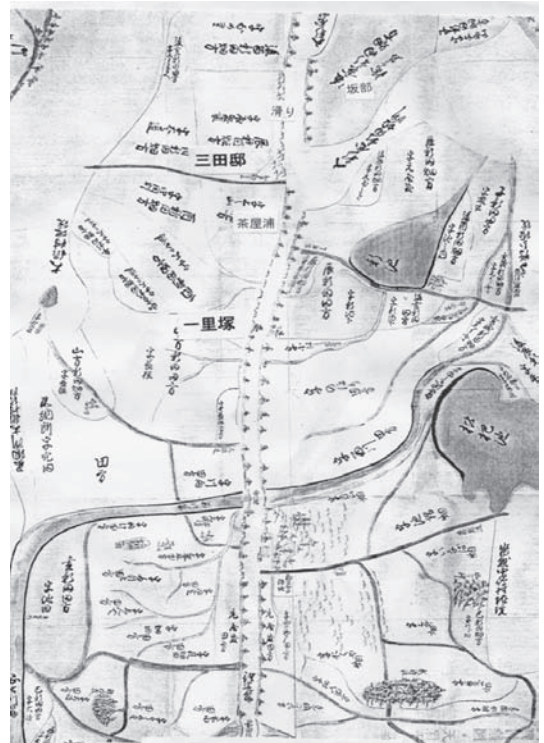


図1 「東阿野村絵図」(天保12年)⁽⁵⁾

1661年(寛文元年)に三田家が名古屋城下から東阿野村に移ったのは、村人が元屋敷から移動を始めた頃で、その定住地選定にもこうした村内の地勢や状況が考慮され、坂部で一番安定した場所⁽⁷⁾に家屋を建て、医業を開始したものと思われる。

また字名の滑(なめり)についても補足しておきたい。その地は東海道阿野一里塚より比高10メートル、長さ700メートルほどを登る坂(阿野坂)の頂上から、前後坂まで続くならかな所を指す。この坂の傾斜地にできた黒部、藤手、滑り、茶屋浦⁽⁸⁾など9つの小字集落を含めて坂部と称され、これらは東阿野村内の東海道筋に古くから形成された枝郷集落であったとの説明⁽⁹⁾が見える。ちなみにこの阿野村・阿野坂は幕末に発

刊された『知多土産』(図2)⁽¹⁰⁾・『名区小景』⁽¹¹⁾にも紹介されており、当地方の名所としてその名が巷間に知れ渡っていたところでもあった。図2には三田邸を主役に滑のゆったりとした情景が描かれ、三田家の住所が後に「豊明市阿野町滑一」とされたのも、こうした事情を踏まえてのものとなる。

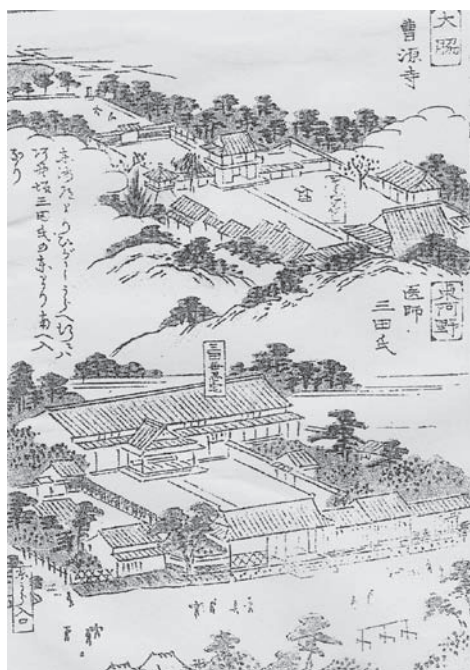


図2 東阿野滑三田邸(『知多土産』)

(2) 略歴—三田氏系図・家譜・由緒書による

三田氏の出身地は三河国花本村である。戦国時代に初代氏成(家康・信康・義直家来)、2代忠房(義直家来)と相次いで徳川氏に仕官した後、1645年(正保2年)に致仕したとされている。

その後1661年(寛文元年)に三田見南(初代無忍⁽¹²⁾)が名古屋城下から東阿野村に移ったが、理由ははっきりとは分かっていない。そして移住後はこの地で医業を開業、代々無忍を名乗って医療活動を展開、1860年(万延元年)には忠純(10代)が法橋位(法印、法眼に次ぐ医界の荣誉)にまで叙せられた。

このように三田氏が同村に居を構えて180年余、「此家代々東阿野村に住す。名方仙壽散は黄胖病の奇薬にして、遠近のもとめ虚日な

きに至れり。もし窮民これを乞ひ求むる時は、財資を厭はず、一銭をも受けず施すよし。慶長の頃より此所に宅地を占め、世々無忍と称して、大厦家屋を構ふ。西国の諸侯上下の時、多くは此家に憩ひ給ふ。国君も素より立寄せ給ひて、拜謁をゆるさる。(後略)」(下線筆者)

と、岡田啓・野口道直らが正鵠な文⁽¹³⁾(下線部以外は)で紹介しているように、当時尾張藩の御目見医師になった忠純時代には同家の名声が広く世間に行き渡っていたことが分かる。そして明治期を迎えて虎二郎(忠純孫)が西洋医学も修得、今日まで350年余にわたる家業を継承、当地域の医療に尽力・献身している。

(3) 医業継承の経緯

三田家の医業創始者となった見南は、名古屋城下で本道(内科)を加島道圓⁽¹⁴⁾、外科を大河内了九より学んだとされている。当時、藩主の病気にも良医師を欠くなど医療体制の整備が弱かった尾張藩では、藩主義直(初代)・光友(2代)が率先して大坂や越前などから名医の招請に努めた。恐らく道圓もこうして招かれたひとり⁽¹⁵⁾で、見南が道圓から医学を学んだのはその晩年期と思われる。以後、三田家では本道は師家につけ、外科は父が伝授するなど見南から重行(8代)への医術伝授と家業継承⁽¹⁶⁾がなされた。当時は医学教育機関が未整備なため、医術の習得は師から親そして子になされ、家業の維持・継承が図られるのが実情であった。

ところが三田家が医業を始めて約120年、同家の医療技術習得に大きな転機が訪れた。それというのも、当時、名古屋城下での医学発展や医学教育環境に大きな変化が生まれており⁽¹⁷⁾、三田重行はこれまでの家内伝授による医療では覚束ないと考え、1784年(天明4年)に息子幸介を山崎専三に師事させ、15年間にわたって新しい医学を学ばせた。当時の山崎は尾張藩の医学教育において中核的役割を担っており、教育方針が「善く学徒を見、常に戒めて曰く、怠の一字万事の廃する所、吾平生人に過ぐる者なし。病のために志を屈せず、其精励終始渝(かわら)ず。(中略)

其の内外を修めて、善く始終する者、近世未だかくのごとき人を聞かず⁽¹⁸⁾と絶賛されるほどの熱心な教育者であった。

(4) 忠純の医学歴

1 医学館で学ぶ

幸介が山崎に入門した時期は、尾張藩での医学教育の条件整備が進んでいた。その恵まれた環境で学んだ幸介ゆえに、跡目の息子・文卿（忠純）の教育にあたっては、さらに良い条件のもとで最新の医学を習得させたいとの強い思いを持ったのも当然であった。

では忠純の医学歴をたどってみよう。先ず 1813 年（文化 10 年）に父の師山崎のもとに入門後、1815 年（同 12 年）に尾張藩の医学館⁽¹⁹⁾に入学した。そこは医学生生の寄宿舎でもあり、親元を離れて、浅井貞庵⁽²⁰⁾以下最高の師のもとで研鑽を積むこととなった。それに医学館は町医になる上での認可機関でもあり、毎年春・秋の 2 回、藩派遣役人が立ち会い、浅井氏が試問、その試験に合格して始めて医業開業ができる場所であった。その後、10 年の修行を経た忠純も厳しい試験⁽²¹⁾に合格、「一人立」が許されている⁽²²⁾。

2 忠純の師匠たち

「長崎帰りの浅野春道ほか、診脈法を浅井貞庵、外科は吉雄常庵に学ぶ。修行で研鑽を積み、30 歳に開業した」と紹介されている⁽²⁴⁾忠純の師匠たちを見てみよう。

先ず浅井貞庵から。生まれながらの神童といわれた彼は、生涯 34 部 230 巻の著作や仁和寺秘蔵の『新修本草』など古医学関係本を多く謄写・紹介しており、医学研究で精力的な活動をみせた。また祖父図南同様に本草学の造詣が深く、その泰斗シーボルトをも驚嘆させたという。こうした視野の広さもあってか、水谷豊文の『物品識名』の出版時には惜しまず推挙の労を取る一方、江戸帰りの吉雄南臯を名古屋に寄留させて尾張蘭学の礎を築くなど、尾張医学の発展に中広く貢献した。それに「四方の学徒雲の如く集り、騷人墨客の往来亦盛んにして、衆以て斯道の棟梁と仰ぐに至った」⁽²⁵⁾と言われる高い人気に 3,000 余人の弟子が寄り集るなど医学教育面での尽力は多大で、葬儀の会葬者は 30 ケ国を越すなど、交友関係には広いものがあった。

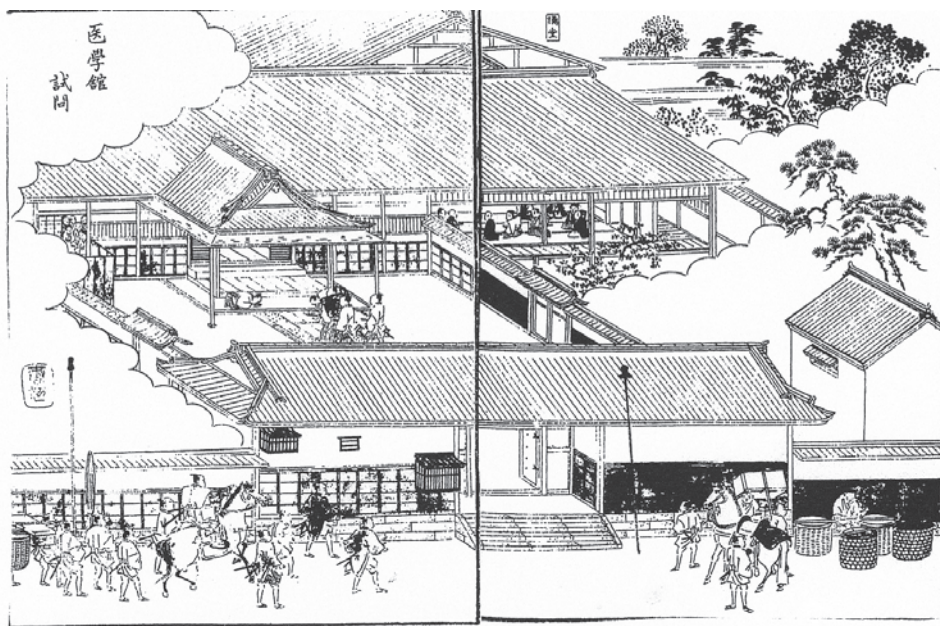


図3 「医学館試問」⁽²³⁾

次いで浅野春道。生家は名古屋城下鍋屋町で日々営業する医家で、志は高く、京都に遊学して香川氏に学ぶ。また小野蘭山から本草学を究めた後、長崎に遊学した。帰名後は1814年(文化11年)奥医師に抜擢されるが、主な任務は国中医師の監督であった。蒐集癖もあり、多くの異草奇花を集めるなど名古屋での本草学隆盛の先駆的役割をなした。

それに吉雄常三(南臯は号)。祖父はオランダ通詞のオランダ医学にも精通した吉雄耕牛で、父・叔父から蘭法医学を学ぶ。しかし家の不祥事で長崎を離れて諸国を流転、大坂・江戸で開塾した。江戸での門人には宇田川榕庵がいた。1816年(文化13年)に浅井貞庵のすすめで名古屋に移り、開業して門人も増えたという。その後は尾張藩に召し抱えられて、御目見医師、奥医師となった。また蘭語の文法に優れ、『和蘭薬劑譜』『和蘭草木譜』などを著した。加えて1818年(文政元年)には観象堂を開塾、暦法や杉田玄白らの訳した『解体新書』を講じている。特に格物の学を好んで討論、観象の語を強調、門弟に「法象を天地に観じ、物を格(いた)し理を究め、遠く造化の淵源を探索し、一切の技芸百般の事業、皆究理を離れず。究理は全く観象に原(もとづ)くの明証を示すもの」と説く『観象図説』を著すなど、科学者の姿勢には独特なものがあつた⁽²⁶⁾。それは志筑忠雄の学風を発展させたもので、弟子には先の宇田川のほか伊藤圭介がおり、常三のこうした観象学は本草学を近代的植物学に転換する上で欠かせない視点であつた⁽²⁷⁾。このように忠純が就いた師匠の山崎専三を始め浅井貞庵・吉雄常三・浅野春道らは、名古屋城下では最高水準の医学を究めた医師たちであつた。つまり幸介に続き、忠純が会得した医学は一段と巾広く新しいもので、幕末期の前に三田家の医療技術に新しい息吹が注入されたことは特筆されてよいであろう。

ちなみに天保年間の藩医と町医の数では、名古屋に約300人の医師が在住していたとされ、そのうち医家出身者の中で2代目は62人、3代目は28人、4代目10人、5代目12人、6代目3人、7代目8人、8代目1人、9代目2人、12代目

1人といられている⁽²⁸⁾。この数字に在村医師の三田家は含まれないが、同期に活躍する忠純は同家7代目の医師でもあることから、尾張藩内では数少ない伝統ある医家といえよう。



図4 「浅井貞庵揮毫書」(三田家蔵)

(5) 弟子の養成

高名な医師であつた三田家には弟子の入門も多く、医術の習得(稽古期間は少くとも10年以上)が完了すると、「一人立」(開業)が許されている。以下は同家史料に確認できるその名簿⁽²⁹⁾で、門人たちは主に知多郡各村に地域医療の拠点を広げていることが分かる。

大符村	村井宗玄(百姓九郎兵衛倅。1782年、開業)
富貴村	浅川藤庵(1782年、開業)
緒川村	兵藤玄仙(兄は御先手同心。1790年、開業)
	息子玄吾(1818年、開業)
半田村	村井宗順(1794年、開業)
杓掛村	若山真太郎(葉栗郡冨塚村百姓甚内倅、1803年、養子開業)
鳴海宿	武陵正健(1818年、開業)
有松村	原乗雲(京都御射山町より)

(6) 地域医療に尽力・貢献

17世紀後半以降の医療体制は、今日からみれば厳しい条件のもとでの施療活動であつたが、そうした中で在村医師三田家の面々が献身した姿を

断片的ながらも見てみたい。

1 中興の人、三田度行

見南が移住して医業を始めた東阿野村は、村中央を東海道往還が延びるものの尾張藩領の東端に位置する小村であった。その後この地であって研鑽に努め、「医業を大弘した」人は度行（5代、1703-1764）であった。彼は日頃から好んで医業に打ち込み、多くの医師が施療困難とする刈谷藩主土井氏の難病治癒には秀逸な力を発揮したという。

また1764年（宝暦14年）の朝鮮使節来日時には、尾張藩主徳川宗睦から礼服一揃を授与され、鳴海宿で同宿医師浜井寿鑑と共に待機、その手当に備えるよう命じられた⁽³⁰⁾。「里医、市医にして外賓者を診るは、蓋し度行が初めて」とあるように、単なる小村医に留まることなく、その名声は「十全の効を治め、四隣に相及ぼす」⁽³¹⁾と、広く近郷に知れ渡るものがあつた。

2 救急医として

三田家史料の中には

五軒屋新田殺傷事件治療（1821年）

因州家中旅人療治（1809年）

旅人（江州蒲生郡、1814年）

旅僧、行倒人（越後頸城郡）

大脇村友心療治

などの診療記述⁽³²⁾が散見する。いずれも鳴海陣屋や庄屋からの緊急呼び出しを受けて施した治療である。その他、容体や症状に応じ、その都度の処置や処方薬を投与して全快に至った例、逆に薬石むなしく落命したなどの記録⁽³³⁾も見える。これらは東海道往還を前に居を構える三田家が、救急医として旅人の治療にも大きく貢献していたことを物語る史実といえよう。

(7) 仙寿散による広域医療の展開

先ず在村医三田家について、その日常的な医療活動の規模はどの程度であったかを見てみたい。

ちなみに尾張領内における医療活動の範囲について、葉栗郡宮田村の医家三輪家が手がけた患者の住所が紹介されており、「(患者の村は)宮田村を中心にほぼ半径6キロメートルの範囲に納まる。歩いて1時間半から2時間以内ということで

あろうか」と触れる箇所⁽³⁴⁾が目を引いた。ここ東阿野村も小村で、こうした医療基盤は基本的には宮田村とさほど変わらないとみてよいであろう。

しかし三田家の治療は東阿野村やその近辺に留まることなく、遙かに広い地域にまで展開された。それを生み出したのは、家伝薬仙寿散⁽³⁵⁾による黄胖病治療であった。同家がこの妙薬をいつ頃⁽³⁶⁾、どのように案出したかを探ってみると、「天明四年に重病の黄胖病治療のため、東阿野村まで16里から17里の遠路を3日間かけて訪れた濃州いじりノ掛村治兵衛」に対し、「仙寿散三廻りを処方した」とある史料⁽³⁷⁾が今までに確認できたものとしては最も古く、1802年（享和2年）に窮民への仙寿散の施薬を求めた鳴海陣屋への願書がそれに次ぐものである⁽³⁸⁾。それは治療・施薬患者数（領分中230人、濃州18人、勢州16人、飛州16人、三州164人）や、1807（文化4）年から1809年にかけて尾張領内（405人、454人、110人）及び三河国など他国（700人、463人、84人）も含めた三年間の治療患者数2,216人とする黄胖病治療の記録⁽³⁹⁾でもある。

また同史料には「領内が広く、窮民之族」に行き渡るのが困難と、同薬の「壹ヶ年に弐郡づゝ、四ヶ年で領内一巡散薬」（藩での検討結果、1回での実施を許可）を願い出たとの内容も書き添えられていて、同薬への三田家の姿勢を示す⁽⁴⁰⁾ものとして興味深い。

これらの数字自体は近世尾張医学史上において注目される貴重なデータでもあるが、時期が三田毅（7代）、重行（8代）、幸介（9代）の治療時代に相当することからも、同薬はこの頃すでに三田家の秘伝薬として多くを製造され、販路の拡大が図られていたことが分かる。

それに高い評判も働いてか、黄胖病治療のために遠方から東阿野村を訪れる患者も増加していたのであろう。1831年（天保2年）には幸介が隣村の五軒屋新田に徳兵衛の協力を得て「病人宿」を設けるべく鳴海陣屋に申請、宿泊診療体制の整備を図っている⁽⁴¹⁾ことにも注目したい。また一枚の短い文書であるが、そこには1828年（文政11年）2月下旬に幸介が10日間ほど行った知

多郡内の柿並、古布、大足、師崎、須佐村などへの往診記録⁽⁴²⁾も読み取れる。これら2例は、この間確認できた幸介による広域的な施療活動の姿とみてよいであろう。

こうした中、1833年(天保4年)には先述のように恵まれた環境で研鑽を積んだ忠純が、家業を継承、施療に当たることとなった。忠純30歳の時で、彼は後の1863年(文久3年)には高祖父度行の百周忌に肖像画を用意、そのもとで祭事を執り行うなど同家に脈打つ医業を顕彰し、大きく発展させた10代目の当主であった。

三田家には忠純が行った黄胖病治療の施薬記録⁽⁴³⁾がある。それによれば尾張領内の知多半島下野間、成岩などの村々や熱田、それに三河刈谷、岡崎、田原、さらに飛弾などで新薬を多くの患者に調査したことがこと細かに書き込まれており、「予ガ施ス黄疸ノ書ヲ見テ、右ノ内薬種薬店ニテ求用ル処、立処ニ下リテ全快ニ相成候」とその成果を強調する添え書も見える。

また同家には、三州赤坂宿、吉田宿、新城、遠州荒井宿、浜松鳴子町、金指村、三ヶ日村などと藩域を越える各所に仙寿散などの薬物を配剤した記録⁽⁴⁴⁾も残されており、19世紀に手がけられた三田家による広域的な医療活動は、幕末まで一貫して続けられていることが分かる。

(8) 名だたる名医・心医として

先項でみた三田家による仙寿散の尾張領内各郡への配布願いについて、たとえそれが同薬の販売・普及での主導的位置を図るものとしても、こうした黄胖病治療への積極的な意欲・行動は高く評価されてよいであろう。とりわけ一般の売価代金「一廻り薬代は南鐮一片」に対して、「貧者・窮乏者には三百文ほど」⁽⁴⁵⁾と社会的弱者の治療に暖かい姿勢を寄せている点には胸を熱くさせられる。それは正に「心医」⁽⁴⁶⁾の姿と言えるものであった。

また1784年(天明4年)、1787年(同7年)年の凶作時には専業の医療活動に止まらず、金子や米の施行、病家への施薬、さらには境川御救御普請工事に駆り出された窮民への救急医療活動など、弱者救済に出費を惜しまず献身したことも特筆される。そして忠純もこうした家風を受け継ぎ、

貧者や窮乏者へ安い薬価代金による施療、天保の飢饉時には私財を投じて村民の救済活動に当たるなど、優れた医療や社会活動を展開した。また幕末期に頻発した社会的事件や災害へも強い関心を向ける一方⁽⁴⁷⁾、後進の指導に熱心で多くの門弟⁽⁴⁸⁾を育てた。それと和漢詩歌の道も究め、伊藤両村⁽⁴⁹⁾や津藩儒者で名文家の斎藤拙堂⁽⁵⁰⁾などとの広い交流もあった。

(9) 東海道往還の地で

三田家は「間口11間、奥行8間、畳数103畳、惣坪数88坪」⁽⁵¹⁾の大家である。現在の建物は、1848年(嘉永元年)に当時47歳を迎えた忠純が「御小休之節手狭」との理由で持ち山から用材を切り出して上棟、御成間上段などを増改築⁽⁵²⁾したものである。同家が位置する東阿野村は東海道鳴海宿と池鯉鮒宿のほぼ中間地点にあって、邸宅前にはなだらかな阿野坂が延び、同家は病気で立ち寄る旅人のほか参勤交代時に江戸と国元とを往来する尾張藩主や藩関係者、さらに諸大名の格好な小休所⁽⁵³⁾となった。それに忠純時代の天保年間以降は史料が未読である⁽⁵⁴⁾が、それ以前の1774年(安永3年)から1820年(文政3年)には松平阿波守や松平安芸守など毎年1名ないし数名が立ち寄っていることが分かる⁽⁵⁵⁾。ただ小休とはいっても、休息場所の提供やお茶の接待だけで済んだ訳ではなく、例えば1832年(天保3年)における細川越中守の場合には同行家来51名へのお茶をはじめ牛蒡やなすび等のにしめ、イカ刺身など料理の提供、かきつばたなどの生花も準備、さらには常滑焼を献上に用意するなど、事前準備に大変な労力と心労が注がれたことがわかる。なお、贈答、拝領の品々⁽⁵⁶⁾などの細かな記述も多く見え、同家にその証となる多くの文化財を残すこととなった。それだけに医家である三田家では、代々にわたって文化・教養への関心⁽⁵⁷⁾が幅広く向けられ、それらは同家の多彩な営みを創り出すバックボーンともなった。こうした雰囲気や機会が藩主はじめ藩当局者の三田家への良い覚えを生み、御目見医師などの待遇獲得にも少なからず有効に作用したものと思われる。

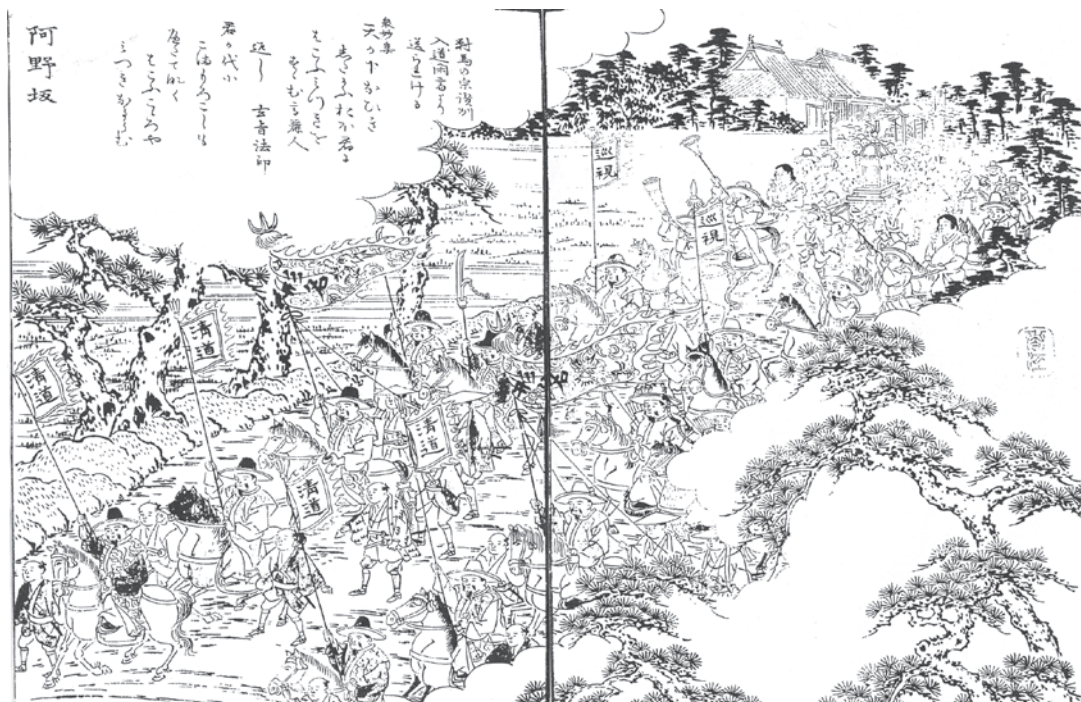


図5 「阿野坂を下る朝鮮通信使」(『小治田之真清水』)

(10) 尾張藩社会の中で

「耆番古記録」の後半は名古屋城下での年頭御目見儀礼への参加記録、文卿の「御目見医」継承を課題とした鳴海陣屋や尾張藩当局との折衝記録となっている。以下、主な動きを挙げてみよう。

御慶事御能拝見 (1763年)

尾張宰相様御家督御祝儀時、拝見 (1739年)

正月晦日拝見 (1782年)

殿様入国御祝御能拝見 (1811年)

宗門自分一札 (1812年)

御目見、年頭御礼 (1819年) 御目見医⁽⁵⁸⁾と称す。

特に幸介から忠純への御目見医御免を継承するよう、先祖三田甚八郎以来の詳しい事蹟を書き上げて鳴海陣屋に提出する一方、勘定奉行所方面ならびに関係年寄・御用人などへの手配や要請を必死に取り続けたことが許可後の御礼廻りからも窺え、注目される。

このように立場保持にこだわる真意については、藩主や通行諸大名から身分を尋ねられた際に「御目見医師では丁寧な取り計らいがなされるも、平医師となつては色々不都合」(下線筆者)との

記述も要請書にあり、その本音がみえて興味深い。また当時の尾張藩では財政難対策としてこれら在农村の豪農・医師など富裕層に苗字帯刀・御目見御免・宗門自分一札などの特権を付与⁽⁵⁹⁾、献金を奨励する策も進めており、このような三田家への対応には、そうした視点からの別途検討も必要であろう。

2. 朝鮮通信使との交流

東海道を前に建つ三田家に、度々往来する朝鮮通信使や琉球使節への興味・関心が生まれるのはごく自然なことで、そのためか同家にはこれらの関係資料が多く残されている。またこうした地域医療に携わる医家がみせた朝鮮通信使や琉球使節などの外事情報に対する関心の高さは、地域の文化力や国際認識の様相を探る上で貴重な資料である。ここでは前者との交流の姿を紹介し、その意味合いも考えたい。

(1) 朝鮮通信使と三田家

道広く朝鮮人も来と也 如風⁽⁶⁰⁾

(「七百五十韻」⁽⁶¹⁾)

句は1682年(天和2年)、鳴海宿を通る朝鮮通信使に寄せて同宿の如意寺和尚が詠んだものである。東海道いっばいに突如現れた朝鮮人は正使以下三百数十人、対馬藩など随行者も加えて2,000人と宿は大賑わいとなった。通常では滅多に見ない異国人で、興味津々、一行の通行に街道筋で心躍らせる清新な情景が17文字で見事に切り取られている。

一行は鳴海宿で昼食を済ませると、東阿野村を経て次宿泊地の岡崎に向かう。当時、沿道筋の民衆がこうした行列に出会えるのは生涯一度かどうかで、この7次天和使節の頃から朝鮮通信使への関心が高まり⁽⁶²⁾をみせていた。この点は三田家⁽⁶³⁾にあっても同様で、東阿野村に移って半世紀、8次【1711年(正徳元年)】使節を初接点に9次【1719年(享保4年)】、10次【1748年(延享5年)】、11次【1764年(宝暦14年)】の各使節団との間に半世紀に及ぶ施療や交流が積み重ねられていく。

(2) 阿野茶屋での馳走

朝鮮通信使への馳走体制は天和度の頃に整えられる。この点を尾張藩領の東部についてみると、前泊地名古屋城下を出発した後、まずは鳴海宿での昼食時、そして次泊地岡崎城下までには、大浜とともに東阿野村の茶屋でもてなしがなされた⁽⁶⁴⁾。この設営には毎度準備の尾張藩から担当役人が鳴海宿より派遣される⁽⁶⁵⁾が、さらに詳しい記録が三田家文書⁽⁶⁶⁾に見られるので紹介したい。

まず茶屋は「上之間」、「中ノ間」それに「土間」を含む60坪程の規模で、用事に備えて中に1つ、外に3つの厠と手桶が用意された。延享使節への馳走では、三使には4組の「枚」(すぎ)重箱、それに「まんちう、ようかん」などの菓子折3組、「煮しめ」折り1箱とともに煎じ茶や上等の清酒、肴なども添えられた。しかし折からの天候不順で一行が遅れて茶屋に到着したため、従事官の曹蘭谷が「尾張守が道端に新築した板屋に食べ物を準備して待っているの、已むを得ず立ち寄った。並び置かれた凡ての諸具は他の站と変わり無かった。呈上した杉重は一行に分けて食べさせた」と記している⁽⁶⁷⁾ものの、三使らは折角のもてなしには食指を動かす余裕は一切なく、つれない態度

で先を急ぐばかりであった。

(3) 延享使節団への施療

なぜこのような事態になったのか、もう少し詳しく事情をみてみよう。1748年(延享5年)2月に釜山を出港した使節は、尾張藩内通過時には往・復路とも悪天候からの苦難を強いられている。まず往路からみると、5月8日8時半(午後3時)頃に大雨のなかを鳴海に到着した。いつもの昼前とは違い、大幅な遅れである。そのため予定変更が検討されるも、7つ(午後4時)過ぎに雨は止んだため、あわただしく岡崎に向けて出発した。途中、東阿野村茶屋までは何とか「雨は降ったり止んだり」ではあったが、夜を迎えて一転、とても寝るところでない往路最悪の事態⁽⁶⁸⁾となった。

次に復路では使節は翌月13日に江戸を出発、折しも梅雨明けの気温急上昇の最中で、以後7月8日に大坂を離れる迄は1粒も雨が降らない、日照りの陸路の暑さを冒して進む過酷な旅路となった。この間に先導役の宗対馬守ははじめ一行の多くが消渴症を患い、茶屋に休み、また毎朝夜明けに灯火を掲げて出発するなど炎天下での消耗を出来るだけ避ける配慮を余儀なくされた。特に往路や江戸の公式行事、さらには炎天下での強行軍の旅で体力を消耗し切ったのであろうか、6月23日の名古屋到着時に正使が熱中症を引き起こすといった最悪な事態に直面していた。

ところで全行程の記録には、特に帰路では毎日必ず一度、あるいは朝、昼、夕の2度、3度の訪問で正使以下一行の健康状態には細心の注意を向けていた様子が行間に読み取れる。こうしたことから正使の発病も23日に突然ではなく、事前に兆しがあって施療手配もされていたのであろう。ともかく正使をはじめ使節団全員の病気を回復しての帰国が最優先課題となっていた。

こうした事情の中、幸いにも尾張藩領入口の東阿野村には医師三田家があり、しかも東海道筋の絶好地でもある。恐らく尾張藩から三田家へ連絡、要請、施療準備が万端に整えられたのであろう。以上がこの間の『奉使日本時間見録』を詳読する中で読み取れる歴史の実相で、「延享五年三使の帰路此家に休みし時は、六月二十三日にして、暑

気甚しく、各水を乞ひけるまゝ、主人葛水を與へしかば、いづれも大に悦び、頓（とみ）に炎熱を忘れしとて」とある叙述⁽⁶⁹⁾も、こうした文脈で読み取る必要がある。この主人とは「葛を砂糖水に混ぜるなどして吞ませる」⁽⁷⁰⁾など、施療に工夫をこらした三田度行であった。

(4) 発見された宝暦使節書画

1 答礼を受けた三田家

正使を始め延享使節一行を熱中症の窮地から救った三田度行、その施療行為は医師としては当然ながらも使節団の胸に深甚な感謝の念を刻み、次使節の来日時に答礼を行うよう受け継がれたのであろう。そのため次宝暦使節の東阿野村通過時には随行画員の金有声（西巖）が小通詞朴徳源と共に一時本隊から離れ、三田家に出向き、謝意を伝えたとされる。

ところで先の『尾張名所図会』には三田家と朝鮮通信使との交流、とりわけこの時に贈られた書・画について、「(前略) …席上に書画等を贈りける。中にも居甘齊(崔北)の詩文、西巖の墨画等尤も多くして、今猶家伝す」との記述がある⁽⁷¹⁾。そして証ともなる遺墨画は、2007年(平成19年)から翌年の東海地方朝鮮通信使研究会による調査で発見することができた。

2 金有声(西巖)の絵画

念願の金有声(キム・ユソン、1725-?)画



図6 「金有声像」⁽⁷³⁾

は偶然にも発見された⁽⁷²⁾。写真1はその「蘭画」(画軸装一幅、紙本。縦幅41.5センチメートル 横幅29センチメートル)で、後日に三田家を訪れた大嶋光義氏が、絵を前にして「多分山間に咲いている春蘭系統の蘭を、簡潔に(さらさらと)描いたもの。先に発見された朴徳源の書「芝蘭」と一対(写真1)のものとして、三田家に贈られたと思われる」と言及した感想、指摘は至当である。軸画は確かに金の他大作とは違って小品ではあるが、三田家と朝鮮通信使にまつわる友誼のエピソードを軽妙な筆運びで描く、画家金有声ならではの作風を感じさせる逸品といえよう。



写真1 芝蘭書と蘭画(三田家蔵)

この「蘭画」の作者金有声(図6)は、西巖を号とした李朝図画署の画員である。彼は宝暦度の来日時には40歳を迎えた実力のある絵師で、今日までに国内では静岡清見寺⁽⁷⁴⁾や建仁寺兩足院⁽⁷⁵⁾などで全14点の作品が発見・確認されており、今回三田家で2008年12月に確認された絵はそれに次ぐ15点目となった。ちなみに「山水に最も秀でた画家」⁽⁷⁶⁾とされる彼の代表的画風には、「朝鮮的山水図(清見寺屏風絵)」、「それとは異なり、中国文人画の皴法を用いた軽快な筆致(建仁寺滝山水図)」⁽⁷⁷⁾の両面があり、朝鮮の代表的画家として懐深く、格調の高い、高雅を極めた作風とされている。また画家としての技量のほか、多くの日本人学者と筆談唱和を行うなど、漢詩文に通じた教養も高い

との指摘もなされている。それに大坂で金有声の描く姿を見て感激したのが日本の代表的南画家の池大雅で、直ぐに「(中国南画の)山や岩の立体感をどう出したらいいか」、「富士山の描き方を帰路に是非教えて欲しい」といった手紙を金有声に出したというエピソードが有名⁽⁷⁸⁾である。

しかも三田家には、その池が揮毫した扁額「摂生堂」がある。医業を営む当主が家号にと依頼したもので、「先祖より大事が起きた際には真っ先に持ち出すように」と言い伝えられた、三田家では最も大事なもの(利保氏)という。金有声の絵から強い影響を受けた池大雅、彼らの絵と書がここ東阿野村三田家に所蔵されるという、それは朝鮮通信使による日本・朝鮮・中国の文化交流が生んだ化政文化の新局面といえ、歴史的意義は大きなものがある。

3 朴徳源の書

2007年1月24日、朴徳源揮毫の書(肉筆掛軸一幅、紙本、縦幅96.5センチメートル 横幅17.3センチメートル)は、東海地方朝鮮通信使研究会による三田家での4回目の調査時に、整理番号のつく300本近い掛軸を1点1点と点検精査するなかで姿を見せた。しかも先の『尾張名所図会』の記述では全く触れられていない予想外の作品であった。

まず朴徳源とはどのような人物か、プロフィールから見てみよう。長年彼を追って研究を続けてきた貫井正之氏は、「その名は宝暦使節の訳官名簿—小通詞(10人)—に見ることができない、正式文書には氏姓は登場しない謎の人物」とした上で、「現在では第11回宝暦使節の小通詞として随行したと推定され、ほぼそれが定説になっている」と研究史を整理した上で、「今回発見の朴徳源書は、この彼の謎を解明する大きな手がかりとなる作品」と言及している⁽⁷⁹⁾。

では書を見てみよう。小幅ながら緊張感ある筆が
芝蘭 生於深林、不以無人而不芳。君子
脩道立德、不以窮困而改節。
朝鮮国朴聾窩徳源書印

と、丁寧な心をこめて運ばれている。

この中国の古典「孔子家語」を引用した詞については、「道を脩め、人徳をみがいて立派になった君子は、苦しさや逆境の中でもその節(立志)を曲げないものだ。丁度芝蘭が状況に関係なく、自然に芳香を放つように」(大嶋光義訳)と解釈されることから、前使節への施療の答礼に贈った医家三田家への讃辞といってよいであろう。

ところで贈詩に当たり、朴徳源が先述のような尾張藩領境の小村で貧者の治療には殊のほか気を配り、代々在村医療に尽くした名医三田家について何らかの予備認識を持っていたかどうかは定かでない。しかしこの朴⁽⁸⁰⁾と金二人になる当意即妙な詩墨画は、小品ながらも三田家の前述した精神的境地を見事に表しており、細やかな気配りで日朝文化交流の姿を伝える秀逸な文化財といって良いであろう。

また今回発見の経緯ではこれら2作品は相前後したもの、何よりも朴徳源「芝蘭」・金有声「蘭」画が同時同場所においてセットで生まれたものと判明したことは何よりであった。つまりそれは両者が宝暦使節随行人として来日していたことをも証明し⁽⁸¹⁾、小通詞朴徳源像をめぐる従来の見解を修正、補強し、朝鮮通信使研究史に新たな知見を提供する意義を生むものとなった。

注一覧

- (1) 三田氏についての紹介は『愛知県医事風土記』(p84、愛知県医師会発行、1971年) 外山駿平「三田家のことども」(一)(二)('広報とよあけ' 228、229号、豊明市発行、1983年)がある。
- (2) 『愛知県史』(資料編17、愛知県発行、2010年)
- (3) 江戸期には知多郡常滑の阿野村と区別するため東の頭称が付けられた。なお阿野の由来について、『愛知県の地名』(平凡社、1981年)では「尾張国地名考」に見える「青野なるべし」を引用、「肥沃な土地を意味する」の説明がある。また江戸初期編纂の地誌『寛文村々覚書』(以下「寛文覚書」)には、村での稲は成長が早く、6月にかけて藩に献上したと紹介している。
- (4) 「寛文覚書」(『名古屋叢書統篇第三巻』、p95-96、名古屋市発行、1966年)

- (5) 徳川林政史研究所蔵(『豊明市史資料篇三』所収、豊明市 1978 年)
- (6) 『尾張徇行記』(『名古屋叢書続篇第八巻』、pp.177-180、名古屋市発行、1969 年)
- (7) 絵図には三田家の東・西より大脇村を経て東浦へ延びる知多郡道、石仏からの大高道と細い筋道も書き込まれている。東阿野村は昔から知多郡内の村や各地域との繋がりが強く、これら諸道は東海道と違い、村人の生活や耕作上で不可欠な道であった。
- (8) 池鯉鮒・鳴海両宿のほぼ中間にある東阿野村は、往還の旅人には休憩が必要となる場所であった。先の「寛文覚書」には「枝郷坂部茶屋町」の記述がみえる。東海道の開通後、阿野坂途中の両側に設けられた茶屋は次第に数を増し、半世紀を経て休憩所などの集落が形成されていたことが分かる。
- (9) 『豊明市史総集編』(豊明市発行、2007 年)
- (10) 『知多土産』(小田切春江編・画 1857 年、愛知県郷土資料刊行会復刻刊行)
- (11) 『名区小景』(小田切春江編・画 1848 年、愛知県郷土資料刊行会復刻刊行)
- (12) 無忍号について。威风凜然とする人格で、人は「無人」と尊称。
- (13) 『尾張名所図会』(巻 6、1844 年、p10、愛知県郷土資料刊行会復刻刊行)
- (14) 駿河国河島村の人、安土・桃山時代の名医、曲直瀬道三(まなせどうざん、1507-1594)に学ぶ。「医に精しく名古屋道三の称あり、寛永八年尾張侯義直召して医師となし俸を賜ふ、後采地三百石を賜ひ、(中略)、寛文 11 年 8 月 29 日没す、享年 87。」(『名古屋市史人物編第二』、p456、名古屋市発行、1934 年)との叙述が見える。
- (15) 先ず 1622 年(元和 8 年)、最初は藤原惺窩の弟子堀杏庵、その後に明人の陳元贊、加島道圓は 6 番目に招請された(大田益三『幕末維新尾張藩医史』p 5、名古屋市医師会発行、1941 年)。
- (16) 但し、この間の家督相続や医療技術継承の全てが順調であったわけではない。例えば 1789 年(寛政 9 年)、三田毅死去の際には急遽隣の大脇村より分家の三田重行・幸介親子が本家に移って相続、しかも間も置かず幼年の文卿(2 歳)に跡目を継がせるなどの苦労がみえる。
- (17) 天明期まで尾張藩では医師になる上での基準はなかったが、1801 年(享和元年)以降は十分な修行を積まないと届け出が難しくなるなど、その取扱が厳しくなった。(『江南市史本文編』(p434、江南市発行、2001 年)
- (18) その人物評について「人と為り直にして敏、豁達周詳、頗る古人の風あり、医を浅井東軒・図南父子に学び、儒を小出慎齋に学びて、皆其蘊奥を究む。後業を開き、業を施し方を講じ、名望頗る高し、天明五年京に入りて法橋に叙せらる。寛政三年藩の寄合医師に拔擢。著述に『尾張禁方集成』(七十五巻)を撰ず。」の記述(前掲『名古屋市史人物編』p478)が見える。
- (19) 京都から 6 代藩主継友に招かれた浅井図南が、天明年間頃に自邸(現、名古屋市中区錦 3 丁目)で医学を講義、医師養成に当たったのが起源。正式には 1799 年(寛政 11 年)に貞庵が藩命を受けて発足、尾張藩内の医家子弟の試験・教育機関となった。その後は名古屋城中別殿、東照宮内(東片端本町西)の明倫堂、さらには文化年中に浅井邸に建設され、1831 年(天保 2 年)に医学館と改称した。
- (20) 貞庵は京都で 7 年間医学を学んだ後、1788 年(天明 8 年)に帰名。教授として本格的に書を講じ、学生の教育を始め医師の登用や免許(町医師)等の取り締まりなど藩の医政全般を司った。(前掲『名古屋市史人物編』p462)
- (21) 絵(図 3)には張り詰めた空気の中で「試問」を待つ、医学生が描かれている。当日は参政 2 人、監察の上司 1 人、右筆の棟梁 1 人に加えて奥医師が出席、問対・検察した(『小治田之真清水』巻 6、p104、1844 年、愛知県郷土資料刊行会復刻刊行)
- (22) 三田家には浅井貞庵が揮毫した「軒轅黄帝」(黄帝は中国伝説の五帝、医師の祖)の書が残されており(図 4)、忠純の終業を顕彰した証となっている。また同家には医学の祖神を描く掛け軸(「神農図」)も多く所蔵されており、年

- 頭には同図の前に最も多い四重の鏡餅が供えられた(前掲『愛知県史』p546)。
- (23) 前掲『小治田真清水』p104
- (24) 外山駿平前掲文
- (25) 前掲大田益三『幕末維新尾張藩医史』p7
- (26)、(27) 水野瑞夫・遠藤正治「本草学から植物学へ」(尾張の本草学の歴史4『日本の生物』2巻5～7号、1988年)
- (28) 山内一信「統計的にみた天保期名古屋の医師像」(『日本医史学雑誌』36巻4号 1990年)
- (29) 「壺番古記録」(三田家文書)
- (30) 「宝暦十四年知多郡東阿野村三田家朝鮮人御用御触状留帳」(三田家文書)
- (31) 「度行百周忌賛三田忠純」(三田家文書)
- (32) (33) 「壺番古記録」(三田家文書)
- (34) 三輪元棟「主方記」(前掲『江南市史』p436)
- (35) 主剤は還元鉄とキナ皮。貧血、疲労、体力減退に効がある。鳥類、四ツ足、そば禁物、1日に3服、7日1廻り、3廻り21包服用などの詳しい処方記述(前掲「壺番古記録」)もある。
- (36) 外山駿平前掲文では、忠純が1833(天保4)年家業継承時の頃と述べているが、間違いであろう。
- (37) (38) (39) 「壺番古記録」(三田家文書)
- (40) 仙寿散の施薬が必要な場合、三田家へ取り次ぐことが必要とされており、この願いは「取り次ぎ」と称して三田家の許可のない仙寿散販売を防止する意図からなされたときれている(前掲『愛知県史』p933)。
- (41) 「書願達留」(三田家文書)
- (42) 「知多郡療治記録」(三田家文書)
- (43) 「黄疸配剤記」(三田家文書)
- (44) 「参州遠州両国覚帳」(三田家文書)
- (45) この点について『尾張名所図会』(前掲)も「若窮民之を乞ひ求むる時は、劑資を厭はず、一錢をも受けず施すよし」と触れている。また先の外山駿平氏も「無貧無富仁術弘敷徳豈無報慶其有余」(貧富の差別なく、誰にも気軽に診察・施薬する。この陰徳はすぐ報いられて、患者が次々と診療を乞うので十分なよろこびがもたらされる)と、三田家に寄せた齋藤拙堂の「扁額銘文」を引いて特筆・紹介している。
- (46) 朝鮮など漢方医学にあって、病気の治療を何よりも最優先と志す医師への敬称。
- (47) 1836年(天保7年)から起筆された「年代記」(三田家文書)には、その年の加茂一揆、さらにはペリー来航情報、安政大地震、お札降りなど幕末期に起きた主な事件の詳細な記録を残している。
- (48) 加藤誨輔(東阿野村坂部)や相羽亮之輔(大脇村)[長崎遊学、蘭法医学学び、明治初年知多でのコレラ治療に当たる]らがいる(『豊明市史』p594、豊明市発行、1993年)
- (49) 儒学者。1830年(天保元年)、杳掛村に両村塾を開く。松本圭堂、村上忠順らを育てる。
- (50) 齋藤拙堂から「撰生堂銘文」の揮毫を受ける。
- (51) 「村内軒別坪数書上帳」(『豊明市史資料編補四、近世2』p77、豊明市発行、2000年)
- (52) 寛文元年に東阿野村に移住した三田家。かやぶき(恐らく同時期に建てられたであろう)の本宅は1705年(宝永2年)に改築(東方奥行き7間2尺、西方奥行き4間半、間口9間)されたとの記録一床の間畳の裏面墨書一が紹介されている(前掲『愛知県史』p534)。
- (53) 医家である三田家は東海道筋の立場も兼ねていたと思われる、とは大嶋光義氏の指摘である。藩主などの小休があったのは、同家が「立場」(休憩所)的役割を担ったもので、齋藤拙堂の手紙表書に「東阿野立場 三田無忍」(下線筆者)とあるも、その暗示である。
- (54) 忠純時代に「参勤交代の際に100回以上が立ち寄った」とする記述(前掲『愛知県医事風土記』p84)がある。
- (55) 「書願達留」(三田家文書)
- (56) 同家に伝蔵される300本近い掛軸などの文化財は、文化史的角度から今後の検討が課題となろう。
- (57) 前掲『愛知県史』(pp.638-641)には同家の蔵書目録が紹介されている。医学書が大半ではあるが、『撰津名所図会』や『平家物語』、そ

- して「俳諧書」などの文芸・教養書も目につく。
- (58) 度行が藩主拝謁御免とされて以後、1819年(文政2年)に三田家(幸介)は御目見医となる。当時の尾張藩御目見医は、知多郡では藪(山口升伯)、大野(佐治東益)、常滑(不明)、乙川(意安)、鳴海(2人, 不明)、阿野(三田無人)の計7人とされる(「文化癸酉医家姓名簿」名古屋市鶴舞図書館)。また忠純は1857年(安政4年)に尾張藩が領内医師の独立開業や新規の薬販売などを管理するために設けた医師締方にも選任され、認可前の吟味・試問も担当した(前掲『愛知県史』pp.660-664)。
- (59) 1856年(安政5年)の階級御免許の数は、927人(内、鳴海代官所管内は89人)であった(『新編一宮市史』資料編10巻p757、1971年)。それぞれ「御目見」「自分一札」「苗字帯刀」を許された者である。
- (60) 芭蕉の門人、下郷知足ら鳴海六俳仙の1人。
- (61) 『日本俳書体系第7巻談林俳諧集』(日本俳書体系刊行会、1926年)
- (62) 通信使が通行する街道筋には遠い瀬戸から名古屋城下の親元に前泊し、早朝から城下西口に待機、使節を見物して深夜帰宅する事例(朝日文左衛門『鸚鵡籠中記』)など多い。
- (63) 「三田家文書」には「朝鮮人御用[宝暦十四年]御触杯留帳」・「三田玄庵先筆朝鮮人来朝記三田文卿」・「通信使到聚楽亭事附国書事」などの通信使関係史料があり、三田家に関わる記録「三田家系図・系譜」、「壺番古記録」にも関係記述が多く確認される。
- (64) 「金府紀較抄」(『名古屋叢書第四巻』、名古屋市発行、1962年)
- (65) 「千代倉家日記抄」(『帝京大学文学部紀要』15 2004年、ほか)
- (66) 「東阿野村一延享朝鮮通信使諸事聞書一」・「三田玄庵先筆朝鮮人来朝記三田文卿」(三田家文書)
- (67) 曹蘭谷著・若松實訳『奉使日本時間見録一以下「見録」一』(日朝協会愛知県連合会発行、1993年)
- (68) その状況の一端が「風雨が益々激しく、夜中大雨の中を疾走、岡崎村に入ると鶏がすでに喧しく啼く。館所では直ちに衣服を着替えたが、全身が寒くて縮むように感じた」(「見録」とある。
- (69) 前掲『尾張名所図会』p10
- (70) 「東阿野村一延享朝鮮通信使諸事聞書一」(三田家文書)には、同記述に続いて「前夜岡崎に宿泊した一行は途中池鯉鮒宿で小休、三使以下には吸物が出された後、本陣に入った上官にはひやしそうめんが振る舞われた」と、直前の池鯉鮒宿でなされた対応の様子も触れられている。
- (71) 『尾張名所図会』の序文は尾張藩儒者深田精一による。三田家には深田揮毫の書がある。つまり三田家に所蔵される朝鮮通信使遺墨画などの情報は、同家と昵懇の深田など「図会」編集関係者に知れ渡っていたと思われる。
- (72) 2008年(平成20年)10月はじめ「新しい文書が蔵から発見された」との連絡で三田家に向かい、10点近い軸画も点検した。探し求めてきた絵はなかった。が、ふと帰り際に目を向けた縁側に伸ばされていた軸絵、その中の「西巖」号に引き寄せられた。何度も凝らして見たが、矢張り間違いはない。突如として姿を現した金有声画。至福の瞬間となった。
- (73) 新山退甫『韓客人相筆話』(郷司泰仁「宝暦度朝鮮通信使の画員金有声について」『青丘学術論集』23号、2003年)
- (74) 屏風仕立の「洛山寺」「花鳥図」「金剛山図」「梅鳥図」がある。
- (75) 「李賀騎馬図」「滝山水」「寿老人図」がある。
- (76) 郷司泰仁前掲論文
- (77) 「建仁寺展図録解説」(2002年)
- (78) 山内長三『朝鮮の絵日本の絵』(日本経済新聞社、1984年)
- (79) 貫井正之『豊臣・徳川時代と朝鮮』(明石書店、2010年)
- (80) 「芝蘭」の詩句では、医家三田家の姿を「孔子家語」の引用で讃え、漢学的素養の博識さに加えて臨機応変な才力も披露した朴徳源。彼には「和歌を揮毫した扇面(個人蔵)」(『大系朝鮮通信使第六巻』明石書店、1994年)があり、「春

をしる まがきの竹の朝霧は 千代もかわらぬ
いろやそふらん」と、ひらかなの和歌が書かれ、
朴徳源の日本文学への造詣の深さと仮名書で遊
ぶ風雅ぶりも見える。

- (81) 先に貫井正之氏による朴徳源の総括的見解
を紹介したが、『大系朝鮮通信使第六卷』（前掲）
では、朴を根拠は不明ながらも延享使節とし、
また『青丘学術論集』（第21集2002年）では、「遺
墨目録」の最後尾で朴徳源の延享・宝暦使節両
論を紹介するなど定見をみていない。その検討
なども今後の研究課題となろう。

付記

この度、故三田利保氏には同家史料の閲覧など
で大変な厚情をいただき、楽しく調査・研究を手
がけることができました。深甚の感謝を申し上げ
るとともに、小稿を利保氏の霊前に捧げます。